

Title	春雨物語「樊嚙」への道程：父を殺すまで
Sub Title	A prelude to 'Hankai' in Harusame-monogatari
Author	大輪, 靖宏(Owa, Yasuhiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1989
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.55, (1989. 3) ,p.207- 222
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	西村享教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00550001-0207">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00550001-0207</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 春雨物語 「樊噲」への道程

——父を殺すまで——

大 輪 靖 宏

はじめに

『春雨物語』の「樊噲」は、上田秋成の文学の最終的に到達した地点を示すものであろうと思う。「樊噲」が秋成の生涯において最後に書かれた作品であるという客観的な証拠はないのだが、私は創作時期を問題として言っているのではない。私が「樊噲」を秋成文学の到達点と言っているのは、内容においてのことなのである。秋成が生涯をかけて、作品の上で試みてきたさまざまな事柄が、すべて「樊噲」の上に現われ、解決を求めてのまとまりを示しているように思われるからである。

そして、秋成にも、「樊噲」については特別な思い入れがあったのではないかという気がする。それは、秋成が、最後となった作品集を編み、その末尾に「樊噲」を置いたということである。

だが、秋成が意識していたか否かについては、あまりこだわらなくてよいと思う。「樊噲」は秋成の作品のなかでは

一番の長さを持っている。一人の人間がその生涯の終り近くに、一番長い作品を書けば、その作品には、その人間が生涯をかけて考えた種々の問題が集約的に現われるのが当然と言えよう。つまり、秋成が自ら意識しようがすまいが、読者たる私たちの方では、「樊噲」を考えるときに、秋成の最終的な姿をそこに感じ取ってよいのではないかと思うのだ。

このように考えてみた場合、「樊噲」を秋成文学の到達点と呼ぶのはさしつかえないことだろう。もちろん、ここで言う到達点とは、あくまでも一応のものである。秋成は、常に自分の文学を發展させ続け、同じ所に停滞することをしなかつた人である。だから、もし、「樊噲」以後にも寿命があつたら、秋成はまた新たな文学的境地を切り開いたと思う。そして、そのときには、「樊噲」は一つの通過点に過ぎなくなつただろう。しかし、現実には、「樊噲」以後、秋成は文学的な進展を行なういとまなく世を去ってしまったから、その後の發展を私たちは見ることができない。そういう意味で、いま私は「樊噲」を秋成文学の到達点と呼んでいるのである。

さて、このように考えてくると、「樊噲」という作品には、特別な興味が湧いてくる。すなわち、他の作品で提起された問題や、一応解決された問題が、ここでどのように扱われているかという興味である。そして、秋成が生涯抱え続けた問題がここでどのように結実しているかは、「樊噲」論としてばかりでなく、上田秋成文学の全体を考えるためにも重要であろう。そういう観点から、「樊噲」で示されている問題が、秋成の中でどのように生じ、どのように發展してきたものであるのかを考えてみたいと思う。

一

「樊噲」の中で、読者に大きなショックを与えるものは、主人公の大蔵が父と兄を殺すことである。大蔵が悪人であ

ることを表現しなかったとしても、ほかに方法はいくらかもある。『孝』がもつとも尊ばれた儒教道徳下の江戸時代ということを考慮に入れた場合、いつそうこの衝撃は大きくなる。

大蔵は、このほかに人を殺し、盗みを働き、暴れに暴れるといった悪事をさまざまに行なっている。悪人ということを表現するだけなら、これで十分であろう。

つまり、大蔵が父や兄を殺すのは、単に悪人であることを表現するだけでなく、もつと深い意味があると考えられるのだ。さらにこのことは、『禁噲』が単純な悪人悔悟の物語ではなく、もつと別の問題を含んでいる作品だということにもなる。

もともと秋成は道徳的な人間である。作品の上にもそうした面は濃厚に現われているのであって、『雨月物語』などは道徳面から言って少しの破綻もないように作られている。このことは、旧著『上田秋成文学の研究』において、『雨月物語』を支配する論理」という章を設けて述べたので、今、詳しく繰り返し返すことはしない。ただ、これから論を進める都合上、少しだけ触れておけば、『雨月物語』では、モラルに反した人間は必ずその報いを受けるように作品が構成されているということが指摘できる。逆に言えば、不幸な状態になる人間を描くためには、必ずその前の段階で、その人間にモラルに反した行為をさせているのである。例えば、『吉備津の釜』の正太郎の場合、結末において恐ろしい殺され方をするのだが、そこに至る前に妻への裏切りを設定してある。一方、『浅茅が宿』の勝四郎は、結末において死んだ妻と再会するのだが、妻からの報復を受けないために、山賊とか病気とかいうように、勝四郎が帰って来られなかった条件を設定してある。したがって、妻を裏切った正太郎は妻からの報復を受けるが、勝四郎はやむを得ぬ事情があったから無事であったということになる。

秋成は『雨月物語』の最後に位置する「貧福論」で、金銭の動きとモラルとを切り離すのだが、その場合も、貪酷残忍の人に金銭が集まり、心の正しい人が貧しいのはなぜかというところから議論を始めている。つまり、モラルの面から見てどうしても金銭の動きが納得いかないために新たな論を作るのであって、このことは秋成がいかにモラルにこだわっていたかを物語っている。

こうした秋成であるから、モラルに反した人間を肯定するようなことは決してない。まして、主殺しと並んでもっとも重い罪である親殺しを犯した人間を許すようなことはあり得ないのである。

## 二

『雨月物語』の世界においては、濃厚に支配しているモラルと対照的に、きわめて希薄に感じられるのが、人間の「情」の問題である。もちろん、モラルと合致する情はさしつかえがない——というより、奨励すべきものであるから、十分に描かれている。「浅茅が宿」の宮木が夫の帰りをひたすら待ち続けるのは情によるものであるが、女の守るべきモラルに添っての行動でもある。「菊花の約」の左門が赤穴丹治を斬るのは、復讐の情もあるが、それ以上にモラルに反した丹治への誅罰である。こうした場合は情の部分も肯定的に描かれるのだが、これに反して、モラルに背いた情は絶対に認められないのであって、「白峯」の崇徳院の怨念の情は西行にたしなめられるし、「青頭巾」の僧の色欲の情は快庵によって碎かれるのである。

このような『雨月物語』の中で、きわめて自然な人間の情として私たちに感じられるのは、「蛇性の姪」における、真女兒に対する豊雄の情である。真女兒は美しいし、豊雄のあこがれている都の風俗や教養を身に付けている。田舎に

生まれ育ちながら、「生<sup>ひと</sup>長<sup>なが</sup>優<sup>よ</sup>しく、常に都<sup>みやび</sup>風<sup>かぜ</sup>たる事をのみ好<sup>この</sup>」んだ豊雄が、真女兒を一目見るなり好きになつてしまひ、熱烈な恋心を抱くようになるのはきわめて自然である。ところがこの恋心は、家の責任者である父や兄の許すところとはならない。当然ここで豊雄は、自分の情と、父・兄の意志との間で悩むことになるはずである。

ところが、実際には、豊雄はそういう状況のもとで悩むことにはならない。なぜなら、真女兒は蛇であるという設定になっており、やがては恐ろしい正体を現わすからである。そのため、豊雄と真女兒の結婚に反対する父や兄の立場が正しいことになり、豊雄は父や兄によって助けられる立場となる。豊雄にとっては、父や兄の意志通りに真女兒への恋心を断ち切ることが正義となるのだ。人間の自然な情が、家の長の意志と対立する危険はこうして回避されている。豊雄は父に逆らうことなく——すなわち、孝というモラルを犯すことなく、無事に自分の人生を全うするのである。

このように、『雨月物語』では、モラルと抵触する情は存在しないことになっている。万一、情がモラルと抵触したら、情の方が悪いのである。モラルの前では情は押さえるべきものなのだ。

しかし、現実としてはどうだろうか。人間の情はそれほどモラルに従属させるべきものだろうか。モラルに反してでも遂げたい情もあるのではなからうか。例えば、「蛇性の姪」の真女兒が本当の人間であり、豊雄と真女兒が純粹に愛し合つたらどうだろうか。それでも、豊雄は自分の情を殺して父や兄に従うべきなのだろうか。

こうした危険な状況は、『雨月物語』の中では発生していない。しかし、『春雨物語』になると、こうした状況が生じてくる。例えば、「死首のゑがほ」の五蔵がそうである。五蔵は、宗という女性を愛している。宗もまた五蔵を慕っている。この二人は氏素姓と言ひ、雅なることを好む性情と言ひ、申し分のない取り合せのように思われる。そして、二人は未来を固く誓い合うに至るのだが、五蔵の父はこれを許さない。宗の家が現在は貧しくなっているのが気に入らな

いのである。こうして五蔵は、愛する女に対する情と、親には従わなければならぬというモラルとの間で苦しむことになる。教養があり、優しい性情の五蔵は、父に対するモラルをなかなか捨て切れぬ。自分の情を一時的には押さえようと努めたりもする。しかし、情は押さえ切れるものではない。そして、女の病気が重くなって猶予の時間がなくなると、ついに五蔵は父に背くことになる。あらゆる徳目の基本として「孝」を最も尊んだ江戸時代において、親に背かざるを得なくなるといふことは、大変な苦しみのはずである。だが、五蔵はあえてモラルを捨てた。

『春雨物語』には、このように人間の情がモラルにぶつかって、人間が苦しむという事態がよく起こる。「捨石丸」では、家を存続させるために捨石丸を討たなければならなくなった小伝次が、人々の難儀を救うためにトンネルを掘る捨石丸の姿を見て感動し、捨石丸を討つことをやめる。このとき、小伝次は「家は亡ぶともいかにせん」と言って決心を固めるのだが、江戸時代において家を存続させることがいかに重大なことであつたかを考えると、この小伝次の決意は大変な苦しみをもたっていることが察せられる。

『雨月物語』を書いたころの秋成と、『春雨物語』を書いているときの秋成とは、情に対する考え方が大きく変わっている。人間が人間としての情を發揮するということを、大切なこととして考えるようになってきているのだ。人間らしく生きるということが、人間を縛っている規約よりも重要視されるようになってきたということであろう。それにしても、『春雨物語』においては、人間が人間らしく生きるために大変な犠牲を払っているということが言えるのである。

### 三

今、私は「モラル」という言葉を使ってきたが、それは、江戸時代の社会規約がモラルによって成り立っていること

が多いからである。江戸時代において行為が他人から非難される場合は、純法律の見地からなされるのが普通であり、これは日本では現在にも通ずることであろう。したがって、今まで使ってきたモラルという語は、社会規約や習慣、あるいは社会の通念という語に置き換えてもよいのであり、さらには、それらすべてを包含する概念とも考えるべきものである。

一方、今まで使ってきた「情」という言葉も、狭い意味には限定したくない。五蔵の宗に対してのものや、小伝次の捨石丸に対してのものは、情と呼んでもいいものだが、それだけではない。人間の素直な感情や、本能的感覚から生じた精神活動のすべてを指し示したのである。人間の精神活動は、社会規約や、法律や、社会通念や、習慣などからいろいろと規制を受けるわけだが、そうした規制を受けない素直な精神活動を今まで情と呼んできたのである。

したがって、五蔵や小伝次の行為は、今までと違った表現をすれば、社会の規約に囚われることなく、自分の感情に忠実な自由な精神を發揮したということになる。

ところで、この、自分の感情に素直に生きるといふのはきわめて難しいことで、大抵の場合、それは社会の指弾を受けたたり、軽蔑を受けたりすることになる。『春雨物語』の中にそういう典型的な例がある。「二世の縁」の定助がそれで、彼は、魚をみて欲しそうにし、与えられれば骨まで食い尽くす。裸でいるのを寒がり、綿入れの着物を与えられると有難がって押し頂く。こうしたことが周囲の人々の軽蔑を買うのである。それは、この定助が、元は入定をした僧であるため、食欲も寒さも超越しているはずだという周囲の通念があり、定助がその通念に反しているからである。このような通念は——すなわち、あの人間はこういう人間だからこのようであらねばならぬとする通念は——人間の精神活動に制約を与えるものであって、これもやはり一種の社会規約なのである。



『雨月物語』の主人公たちはこうした社会の規約に忠実に生きだし、また、それに反した場合は誅罰を受けても仕方がないという扱いをされていた。しかし、秋成の人生経験が深まるにつれ、そして、秋成の精神が自由を求めるにつれ、こうした制約の中に身を屈めている人間は魅力のないものとして、秋成に感じられてきたのだろう。秋成晩年の作品集である『春雨物語』には、社会の制約があるにもかかわらず、自分の心に忠実に生きようとする人間が多く描かれるようになる。今、触れた「二世の縁」の定助にしても、社会の指弾や軽蔑を受けることは受けるが、決して自分の生き方を変えないでいるのである。

ただ、社会の制約から解き放たれて、自由に生きるといのはきわめて難しい。『春雨物語』の各作品の主人公たちの苦しみは、大部分がそこにある。「二世の縁」の定助の場合は完全に周囲の人たちから軽蔑を受けることになってしまいが、このような軽蔑ではないにしても、周囲の通念が要求するものと、自分の心の求めるものとの間で悩む人間は多い。「宮木が塚」の宮木は、遊女の身という立場に対して周囲から加えられる制約と、純粹な自分の情である十太兵衛への愛との間で苦しむ。「血かたびら」の平城帝は、帝位にある人に向けられる周囲の期待・圧力と、直きがまに生きたいという自分の素直な感情との間で苦しむ。「天津処女」の宗貞は、自分なりに身を保つ努力をするが、それは周囲の目からは批判的となり、軽蔑を受けることになる。「死首のゑがほ」の五蔵の問題、「捨石丸」の小伝次の問題はすでに述べた。いずれも自分なりの生き方をしようとするとき、社会の規約や通念とぶつかってしまい、苦しむことになるのである。

『春雨物語』は、一口に言ってしまうえば、社会の制約があるにもかかわらず、自分なりの生き方をしようとする人間を描いた作品と言えるだろう。これは精神の自由を大切に思う気持ちから生まれてきたものであろうし、そう考えれ

ば、「歌のほまれ」のような、一般の概念からすれば小説と呼べないようなものが『春雨物語』中の一編として入っている理由も、一応説明がつく。「歌のほまれ」は『万葉集』における類歌を論じたものだが、「いにしへの人のこゝろ直くて人のうた犯すと云ふ事なく思ひは述べたるもの也」とか、「歌よむはおのが心のまゝに」とか、「たゞ／＼あはれと思ふ事は、すなほによみたる」とかいう言葉から分かるように、囚われない心を称揚しているのである。歌を詠む場合にもさまざまな制約があり、その制約の中で窮屈な思いをしているのが普通だが、そうした制約に囚われず、「心のまゝに」詠む自由さを尊んでいるのである。

「歌のほまれ」は小説の態を取っていないが、この文で論じられていることは、他の作品で追求している問題と共通しているように思う。そしてまた、「目ひとつの神」においては、都にのぼって師に付くことを望む若者に対して、目ひとつの神がその愚を論しているが、ここでは、文を書いたり歌を詠んだり、「己が心より思ひ得たらんに（自分の心から作りあげていくものであるのに）」と言っている。これもやはり、人間精神の自由な発露を主張しているのである。さらには、「海賊」における文屋の秋津の、ものに囚われない思考や行動もある。

以上の三作は、いずれも文芸・論説の上に発揮される人間精神の自由さということがテーマになっている。文学・学問の上の精神的自由も、実生活の行動の上の精神的自由も、根本は同じであって、現われ方が違うだけなのである。

『春雨物語』においては、こうしてあらゆる面から精神的自由の問題が取り上げられているということを考えてみると、秋成にとってこの問題がいかに重要であったかがよく分かると思う。

秋成がなぜこのように精神的自由を求めたのか。おそらくそれは秋成の実生活と無縁ではあるまい。

秋成は商家に育った人間だが、商家の跡取り息子として行動するのはかなり苦痛だったと思われる。若いころの秋成が家に寄り付かないで遊び歩いていたというのも(自伝)、あるいはそうした苦痛を逃れるためかもしれないが、それ以上に、晩年の姿が商家には向かない秋成をはつきりと示している。秋成は五十四歳のときに医を廃してから七十六歳で死ぬまで、まったく職を持たず、歌や文を作って人生を過ごしたのである。その医にしても、本来なら商家としての上田家を再興しなければならなかったのに、三十八歳のときに火災に遭ったのを機に商をやめてしまい、医に転じたものである。商よりはまだしも医の方が秋成にとってはよかつたということらしいのだが、こうしたところにも商に馴染めなかつた秋成の姿が伺われる。

痛症で、妥協を嫌い、文雅を好む秋成が、商に馴染めないのは当然だろう。

ただ、若いころの秋成はそうした自分の気持を表面に出すことはしなかつたようだ。それは、秋成が上田家の実子ではなく、「我は捨てられたるを拾ひて給へりつれば」(自伝)という意識のもとに上田家の中で暮らしていたからである。父親の目にも、秋成は「心直き者」(自伝)と映っているのであって、父親の在世中は立派な息子たるべく努めていたのである。しかし、秋成の心の中ではおそらく相当の葛藤があつたことだろう。自分の好むことをやりたい気持と、家業を受け継いで発展させなければならないという義務感との間で苦しんだことと思われる。

そういう秋成にとって、父親の存在は非常に大きかつた。秋成の養父上田茂助は、養子として上田家に入り、家を隆

盛に導いた人であつて、拾われた子である秋成の逆らうことのできる相手ではなかつた。この父親が、秋成二十八歳のときに死んだ。その後、秋成は本格的に歌の勉強を始める。また、小説の分野では、三十一歳のときに『諸道聴耳世間猿』を書き上げており、引き続き『世間妾形氣』を書く。父親の死から、急に秋成の文学活動が活発化するのである。そして、先に触れたように、その後、火災に遭つたときに商を廃してしまう。

秋成自身は決して父親に対して批判的な言辭を弄してはいないが、彼の精神活動の上において父親は相当に重苦しい存在であつたようだ。

こうして秋成は自由を得て、国学の勉強をしたり、『雨月物語』を書いたりするようになる。しかし、行動の自由とは違つて、精神的にはあまり自由になつていない。それは、家業を捨てたということが常に秋成の心を責めるからである。秋成は、晩年になつてからも、「翁、商戸の出身、放蕩者ゆへ、家財をつみかねた」（胆大小心録）と言ひ、「産ナク居ナク漂泊凡三十年、今ヤ郷土ヲ離レ六親ニ別レ、狂蕩云ベカラズ」（実法院主あて書簡）と言つている。呉春（松村月溪）あて書簡では「城市の火災より薄命の事のみ、是は無産の罪」とも言つている。無産とは仕事を持たぬことである。秋成は死ぬまで、家業を捨てたことを罪に感じていた。

秋成は商を続けるために自分の性情を押さえ付けていられる人間ではなかつた。しかしまた、家業を捨てて平然としていられる人間でもなかつた。秋成の神経は繊細であり、潔癖であつたのである。商を廃したあと、いったん医に従事したのも、別に医が好きだつたからというわけではない。商を続けるのは嫌だが、文雅に遊んでいるのは上田家の名からも世間の手前からもできないという。両方の悩みの妥協点だったのである。そして、その医もやがて秋成は捨てた。医にも安住はできなかつたのである。したがつて、秋成は、若いときは商を続けることに苦しみ、医にあつてもそれに

苦しみ、晩年は業を捨てた自責の念に苦しんだ。

こうした秋成にとって、精神の自由を得るといふことは、あまりにも困難と感ぜられることであつた。そして、それだけに、精神の自由にあこがれた。どうしたら自分の信じてことに、やりたいことに、我が身を委ねることができるか――、それが晩年の秋成の課題だったのである。

『春雨物語』はそういうところから生まれた。『春雨物語』の主人公たちは、いずれも自分の信じてこと、やりたいことにしたがって行動しようとする。しかし、こうした行動にはきわめて大きな障害がともなうことを、秋成は経験的に実感として知っている。こうした行動が、場合によっては、自分もしくは周囲の人を不幸にすることがあるということも知っている。やりたいことを思うがままにやれば気持がすっきりするといふほど、人間の心は単純なものではないし、また、それを抵抗なく許すほど、人間の社会は甘いものでもないといふことを、秋成は十分すぎるほど知っているのである。それが『春雨物語』の上に反映する。『春雨物語』の各作品の主人公たちは、こうした点でそれぞれに苦しむのである。

## 五

『春雨物語』における人間の精神活動を考えてみると、主人公を取り巻く人間社会の条件が、主人公に対して非常に厳しいことがすぐ分かる。これは秋成が実生活から社会の厳しさを感じ取った現われなのである。「血かたびら」の平城帝や「宮木が塚」の宮木はそうした中でひたすら自分なりの生き方を努めるが、結局、周囲のさまざまな動きに流され、破滅に向かうことになってしまう。「天津処女」の宗貞や「二世の縁」の定助は、やはりそれなりに一生懸命生

きるのだが、周囲からの軽蔑を受けることになってしまふ。自分の望むところを押し通すのはきわめて難しいのだ。

そういう中で、社会通念や周囲の反対にあえて逆らつて、自分の意志を押し通すのは、「死首のゑがほ」の五蔵と「捨石丸」の小伝次である。五蔵は親の反対を受けて悩むが、最後には親を捨てて、自分の信じる道を取ろうとする。小伝次は家が断絶するのを覚悟の上で、捨石丸を討つことをやめる。「樊噲」をとりあえず保留しておく、自分の意志を貫き通しながら敗者にならなかつたのは、この二人である。そして、この二人がともに、親と家とに向かい合い、その重圧と戦つて、最終的にこれを捨てる決心をしているのは興味深い。秋成が親の意志からなかなか逃れることができないうでいたらしいこと、また、火災にあつた後に上田家を存続させなかつたことに終生自責の念を持っていたことなどを連想させるからである。

秋成にとつては、真の自由を得るためにはどうしたらよいかという命題に立ち向かうとき、親と家という問題を見無視することができなかつたのだ。親と家というのは、人間の精神と行動の自由を妨げる諸条件の象徴的存在だったのだ。

このように、「樊噲」を除く『春雨物語』の諸作品を考えてきて、それに秋成の実人生を重ね合わせてみると、最後の「樊噲」において、大蔵が父・兄を殺し、家を捨てる理由がよく分かつてくる。「死首のゑがほ」の五蔵も「捨石丸」の小伝次も、まだまだ不徹底なところがある。五蔵は最後の最後まで父の意に添うよう努力するし、小伝次も最後まで家を存続させるべく努める。こうした妥協点を求めての手探りをしているかぎり、人間はいつまでも自由の境地は得られない。秋成自身も五蔵や小伝次のように努めたのであり、しかもそれで自由な精神は得られず、最後まで悩むことになつたのである。

不徹底なままでは駄目だ。思い切つて、人間を束縛している絆を根本的に断ち切らなければならない。親を殺し、家

を捨てる——。親や家というのは、社会の道徳や通念の象徴であるから、これらを断ち切ったとき、初めて、人間は、あらゆる制約を逃れて、真の意味での自由な精神と行動を得たと言えることになるのだ。それが「樊噲」における大蔵の姿なのである。

家を捨てるというのはまだしも仏教の出家などで見受けられることであるが、親を殺すとはいかにも過激である。しかし、この過激さは、人間が真の意味において自由になるにはこれほどのことが必要であるという、秋成の決意の物凄さを語っているのである。親を殺すということが重大であればあるほど、そうまでして得なければならぬ精神的自由の重みが増してくる。このようにして、「樊噲」という作品において、秋成ははじめていかなるものにも束縛されない人間を作ったのである。

ところで、「樊噲」において、大蔵が殺すのは父と兄であって、同じ親であっても母親は含まれていない。これは秋成の実生活がここに反映しているのだと思われる。

旧著『上田秋成——その生き方と文学』の第一章で、秋成を育てた父や母のことを考えてみたことがあるので、今、詳しく繰り返すことをしないが、秋成にとって、父と母とはずいぶん違う存在であったらしい。養父茂助は立派な人であるだけに、かなりの重圧を秋成に与えたようだ。もともと江戸時代の家庭においては、家長たる父というのは絶対的な存在であるが、秋成の場合にはそれに、自分が拾われた人間であるという負い目の認識が加わっている。そしてまた、「樊噲」には兄が出てくるが、この兄は父と同じ言動を取っており、次の家長ということ、父の分身であろう。「蛇性の姪」の豊雄にとっても父と兄は家長ということで一体化している存在であったが、「樊噲」の場合も同様である。

しかし、母は違う。秋成にとっての母親というのは、実母・第一の養母に次いで三番目の母のことであるが、この母は秋成と暮らす時間も長く、秋成の理解者であったのである。この母は、秋成が商を廃するときにも、医を廃するときにも（一応の意見はしているようだが）理解ある態度を示している。秋成の行動にはほとんど束縛を与えていないのである。秋成が晩年において、「後母依慈愛成長」（自像宮書）というように愛情をこめて語るのもこの母であるし、親不孝という自責の念も、「後母ノ意ヲトリカネ不孝不可述」（実法院あて書簡）というように、この母に対して感じているのである。

このような秋成の実生活の体験が「樊噲」の上に反映しているのである。主人公大蔵が性情の赴くままに自分の邪魔になるものを取り除いていくのだが、そのとき、母を殺すようなことはせず、父・兄を殺しているというのは、秋成の生身の感覚から生じているものなのだ。

「樊噲」の親殺しは、作者の頭の中の概念の遊びから生じたものではなく、秋成の実人生から絞り出されたものであることがここからもよく分かる。秋成がどれほど強く精神的自由を欲したかが、「樊噲」という作品の成立に深く関わっているのである。

### おわりに

「樊噲」における父・兄殺しは、秋成の人生の最大の課題の決算とも言うべきものである。「樊噲」以前の秋成文学の上に現われたさまざまな問題も、その大部分はこの課題を秋成なりに考えてみた結果の一つ一つと見るべきものなのだ。『雨月物語』において、モラルが作品の上に色濃く現われているのも、自分の欲する心に従うと親や社会の通念に



背くことになってしまふという秋成自身の悩みと関係があるように思う。しかし、この問題が本当に重要なものとして、文学の上に現われてくるのは『春雨物語』である。

そして、その『春雨物語』においても、秋成はなかなか思い切った結論を出すことはできない。「血かたびら」の平城帝や「宮木が塚」の宮木のように、周囲の動きに逆らうことをせず、ひたすら耐えるという人間を描いてみたりする。「死首のゑがほ」の五蔵において親に背く行為を取らせるが、この場合もこれ以上は無理というところまで五蔵に耐えさせている。「捨石丸」の小伝次には家を捨てる決心をさせているが、最後に至って、いささか御都合主義的な筋書きで家は存続することになり、ますます栄えるということにしまつてしまっている。

こうした秋成が、ついに、「樊噲」において、親を殺し、家を捨てる行為を主人公にさせる。社会的制約の中で、それとぶつかることなく、何とか己の欲するままに生きたいと考えてきた秋成が、最終的にもうこれ以外に方法がないというところまで来た、ぎりぎりの選択なのだ。

こうして「樊噲」という作品が始まる。親・家によって象徴される、社会的制約のすべてを振り切った人間が設定されたのである。「樊噲」が上田秋成文学の最終的に到達した地点にあるというのも、このように考えて来た結果の結論なのである。

ただ、今はようやく「樊噲」論の入り口にたどり着いたところである。次稿においては、これをもとにして、「樊噲」の全貌を考えてみなければならぬと思う。